第１部パネル　分科会 2　継続／大阪27

我が事・丸ごとや小規模多機能自治などの地域づくり活動と生活支援活動とをどう結び付けるか

提言

時に１人の困りごとに寄り添うことから、
時に誰もが集える「場」で共に過ごし、
学びあうことから、
自らと互いの思いに気づき、声となり、
活動が生まれる。
そのプロセスの積み重ねが、
オールジャンルのチームにつながる。
まずやってみよう！
そして、歩みを止めずじっくり楽しもう！

登壇者

【進行役】
堀田　聰子氏　慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授
板持　周治氏　雲南市政策企画部次長兼地域振興課長
藤本　勇樹氏　名張市地域経営室地域マネージャー
上田　正之氏　（社福）庄原市社会福祉協議会会長（前庄原市第１層ＳＣ）
唐木　啓介氏　厚生労働省社会・援護局生活困窮者自立支援室長／地域共生社会推進室長

■ 寄せられた声から

- 重層的支援制度の活用について既存のシステムに活用できれば活用し、既に類似のものがある市町村は様子見をする。「うまく活用すればいい」という発言の背景がとても具体的でわかりやすかったです。
- 地域共生社会や重層的支援体制整備事業を進めるにあたって、制度・分野ごとの壁や縦割りは不自然であるとの発言に共感した。人と人、人と資源が世代や分野を超えて「丸ごと」つながらなければこれからの福祉は成り立たないと思う。

議事要旨　堀田 聰子氏

本分科会は、大阪サミットでは、「地域の今と未来を語りあい、一人ひとりの志・つぶやきが形になり、課題解決がはかられるよう、情報共有と対話・学び・アクションのプラットフォームを」と提言していました。

これを受け、今回は島根県雲南市役所から様々な立場で小規模多機能自治を進める板持さん、三重県名張市役所から対人専門職の背景も持ちながら地域づくり支援に取組む藤本さん、広島県庄原市から第１層生活支援コーディネーターの経験を含め地域福祉社会づくりをライフワークとする上田さん、厚生労働省から地域共生社会の推進をはかる唐木さんにご登壇頂き、議論を深めました。

板持さんは、小規模多機能自治の仕組みと雲南市における概ね小学校区単位の「地域自主組織」を基盤とする地域づくり、地域づくりからみた福祉分野とのかかわりをご紹介くださいました。どこでも福祉が重要課題になっており、中学生以上の全住民アンケート調査を行い、地域単位の計画づくりに反映すると必然的に福祉活動にも取組むことになる、日頃からイベント型ではなく課題解決型の活動になっていると、災害時の対応力も高いことも教えて頂きました。

藤本さんは、小学校圏域に設置した「地域づくり組織」と地域包括支援センターのブランチとしての「まちの保健室」の両輪、多機関協働による包括的相談支援体制（高齢・障害・児童・困窮・教育の各分野に地域包括支援センター兼務のエリアディレクターを配置）をつうじた名張市の地域共生社会実現に向けた取組みをお話しくださいました。多くの地域づくり組織で住民主体の生活支援サービスが広がり、さまざまな活動が生み出されていることも印象的でした。

上田さんは、庄原市における「自治振興区（住民自治組織）」によるまちづくりについて、生活支援体制整備事業がスタートした際に第２層協議体と位置づけ、生活支援コーディネーターの伴走によって地域の現況を住民自ら棚卸し、活動を起こしていく動きに焦点を当てて話しくださいました。行政や医療介護事業者任せ、既存の事業や組織の壁に対して「出向く・粘る・人を地域を信じる！」で働きかけ、温度差や時間差があっても住民主導の住民互助を進めることの大切さを訴えて頂きました。

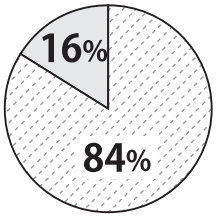
唐木さんからは、地域共生社会を取り巻く背景と議論の経緯、その推進に向けたツールとして2021年４月から施行された重層的支援体制整備事業について、プラットフォームを中心にご講演頂きました。

その後、地域づくりやそのプラットフォーム、どこから始めてどう育てるかについて討論、一人の困りごとや想いから人とひと、場をつなぎ、生の声から形にして見える化すること、既存の活動や団体を活かしながら学び合いとそれを支える仕組みをつくること、防災等を手がかりに地域同士の連携をすすめること、推進側がぶれずに丁寧にプロセスを積み重ねればオールジャンルのチームにつながることが語られました。

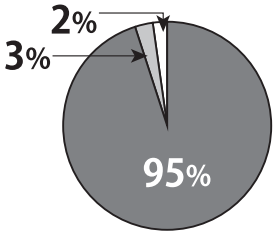
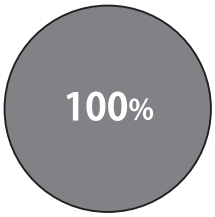
重層的支援体制整備事業はどう使えるかを含めて東京サミットでさらに議論を深めたいと思います。

アンケートの結果　参加者概数：243名（オンライン：234名、会場：９名）　回答者数：70名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方